
見知らぬ星の魔王様

和式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見知らぬ星の魔王様

【Nコード】

N6334I

【作者名】

和式

【あらすじ】

重力を失った少年のたどり着いた場所。そこには・・・？

笑いあり、感動あり、バトルありの物語。

地球が引力を失った日。もしかしたら、そういうこと。

それは突然の出来事だった。授業を終えて家路につく俺の体はゆっくりと地面を離れ、そして高く澄み切った、冷たい秋空へと、真っ逆様に落ちていったのだ。

不可思議だった。あまりに突拍子がない。声も出ない、抗いようもない。

あっという間に都会のビル群を抜け、やがて蒼い海と日本地図が眼下、いや頭上に広がった。雲を突き抜け、俺の体は急転直下、天に吸い込まれていく。

夢ならばなんと爽快な夢だろう。現ならば、俺の身体は大気圏の辺りで燃え尽きてしまうだろうか。

急に視界が真っ白になり、俺はもう何も考えられなかった。そして考えもしなかった。この先に待ち受けている世界について、俺はまだ何も知らなかった。

目を開くと真っ先にそれは視界に飛び込んできた。

それはあまりにも巨大で、暗闇のなかをひととき美しく、白い靄に包まれながら青く光り輝いていた。

俺は我が目を疑ったが、やがて確信した。目の前の広大な青い惑星は地球であり、俺は今それを月から眺めているのだ。

ふと、頬を伝うものに気づいて俺は驚いた。後頭部に柔らかい温もりを感じながら、言葉にならない感動に胸を打たれていた。

夢だったのだ。月から本物の地球を、女の子に膝枕してもらいながら眺めることは、俺の人生において叶うはずもない夢だった。だがこういうわけかその夢は今、現実となっている。

「夢じゃないでしょ」

女の子は幼子のような話し方をした。俺は眠い目を擦りながら起き上がり、至って冷静に彼女を見た。恐らく俺より少し年下で、黒髪、巨乳、さらには黒色の露出度の高い、それこそ服か下着か判別がつかないほどの際どい格好をしている。へそも太ももも露わで、こんなのが公道を歩けば逮捕または拉致監禁されかねない。おまけに背中には黒い羽が生えているときた。間違いない。これは夢だ。

「だからこれは夢じゃないでしょ。あなたは今、わたしと一緒に月から地球を見てる、これは事実でし。あ、その目はちっとも信じてないでしねえ？」

「ならば聞くが、どうして宇宙空間で息が出来る？それに宇宙服が無ければ俺たちの身体は膨張して死ぬはずなんだよ。だいたいなんでも月に女の子がいるんだよ、俺の頭の中は女の子のことばかりなのか？」

俺は独り言のように言ったが、ふと考え直した。どうせ夢ならば、夢なりに楽しまなければ損だ、と。しかも今日の夢は近年まれに見

る良い夢だ。そうさ、これは夢なんだ。

一方、俺の企みなどつゆ知らず、夢の中の少女は得意気に話し続けていた。

「ですから、それはモチロンわたしが結界を張って気圧を調整しているのです。実はあなたをここに呼んだのもわたしが銀河系の引力関係を操って…、って何するのですか!？」

「よいではないか、よいではないか、うひひ」

「きゃっ! くすぐったいでし! ほっぺたで太ももすりすりしないで…ああんっ!」

「ああ、気持ちいい…夢みたいだ…」

「い、いい加減にするでし…夢じゃないって言ってるやろ! えいっ!」

少女は俺の頭をグーでポコッと叩いた。もちろん全く痛くない。

「夢だから全然痛くないですよおお! そーれ、すりすりすりすり…」

「くううつ…、こうなったら…:これだけは使いたくなかったのですが、くらうでし! イースちゃん必殺の魔眼交殺法!」

ずどんっ、と、割と痛快な音が辺りに響く。

少女の右手がチョコキを形作ったかと思った刹那、それは俺の両目

を勢いよく突いた。

哀れな俺は両目を抑えて月の上を転がり、のたうち回った。おかしい。夢のはずなのにこの激痛はどういうわけだ。

「そんなに夢がみたいなら、あの世でいい夢みるでし！イースしゃん必殺の金的タイガーシュート！」

視力はまだ回復していないが、少女の掛け声から何が起こったかは容易に想像がついた。

下半身を吹っ飛ばすような激痛が走り、俺は呼吸困難に陥った。股間を抑えたまましばしの間、悶絶した。

「ぐああっ、い、痛い…果てしなく痛い…、夢なのに痛いよ」

「だから、夢じゃないって言ってるでし！」

少女は膨れっ面で主張したが、それよりも俺は自分の股間の安否こそ気がかりだった。恐る恐る確認したが、安心した。二つとも辛うじてお星様にはならず済んだようだ。

「まったく！人がせっかく最後くらい良い夢見させたらーと思ったでしのに…、地球人はすぐ調子に乗るでし！」

「…夢のなかの住人のくせに生意気な奴だな」

こんな小娘に後れなどとらない。俺は強気な態度で言ってやった。右手で指を差し、左手で股間をガードするのは忘れない。

「ここは俺の夢の中だ！つまりここでは俺が王様ってことだぞ！俺のお前に対する全ての行為に対し、お前に拒否権はない！」

「その夢の解釈はどうかと思うでし……。ってそうじゃないでし！
ここは夢ではなくて、現実世界なんでし！」

「くっ、股間が軋むように痛むぜ……。もうこんな夢はこりごりだ！現実世界の俺よ、早く目覚めてくれっ……」

あのあたりが日本だろうか？俺は地球に向かって両手をあわせて祈った。

「うう……。ユキトさんはどうしてもこれが夢だと信じるのでしね……」

少女は心底がっかりしたようにため息をつき、ふらふらと歩き出した。

「……毎度のことでしが、地球人は物分かりがもの凄く遅いから、もの凄く疲れるでし……。いいでしよ、ユキトさんの気が済むまで、イースはずっと待つでしから」

少女はがっくりと肩を落とす、こちらに背を向けて座り込んだ。背中の羽もすっかりへたり込んでいる。

「俺が遅い？この俺がスローリィ？」

目の前の少女は、学園一の切れ者と呼ばれたこの颯はやて 行人様ゆきんに、状況を飲み込めていないと言いたいのか？

たしかに、股間の痛みは嘘じゃない。仮に夢じゃないとして、俺の生活はどうなる？男子に讃えられ、女子に罵られ、担任は優しく微笑む、あのつまらなくも退屈な俺の学園生活は一体どうなる？

頬をつねってみるが、痛くない。代わりに平手で打つてみる。まあまあ痛い。

「なあ、ちょっと聞きたいんだが…」

「はい、なんでしの？」

「例えばの話だ。例えばこれが夢じゃないとして、俺はどうなるんだ？ 一生ここで、月で暮らすのか？」

「いいえ、もちろんそんなことはないでしょ。わたしが責任をもつて、あなたを送り届けますでし！」

少女はにっこりとほほえみ、ブイサインを作って見せた。

俺は右手で思いっきり頬をつねってみた。かなり痛いじゃないか。

「疑ったりして、あと太ももすりすりしてすみませんでしたああ！」

俺は少女の正面に回り込むと、地面にめり込まんばかりに頭を下げて土下座した。突然の手のひら返し。これには少女も驚いたようだが、やがてにっこりと微笑んだ。

「いいんですよ、もう過ぎたことでし。それよりもユキトちゃんに信じてもらえたことが、イースはとっても嬉しいでし、嬉しいでし…」

少女は目に浮かんだ涙をそっと人差し指で拭ってから、恥ずかしそうに微笑んだ。怒ったり泣いたり、忙しいやつだ。

「では、あらためて自己紹介しますでしね。わたしの名前はイースとある星系からユキトちゃん、あなたに使命を与えるためにやってきましたでし！」

イースと名乗る少女はビシッと俺を指さし、偉そうに、馴れ馴れしく、かつ得意気に少し鼻息荒めで言った。イラっとしたのは言うまでもないが、ここは我慢だ。全ては無事現実世界に帰るため…。

「では、わたし直々に勅命しますでしから、ユキトちゃんは心して拝命するとよろしいでし。では言うでし」

「あの、イースさん、話の腰を折るようで悪いんだけど、一つ質問していいかな？」

「なんでしか？手短かに頼むでし」

ここは我慢だ。

「…」

「早く言うでし」

「…使命もいいけど、そろそろ地球に帰してくれないかな。家族とか友達が心配するだろうし」

「地球に帰りたいでしか？残念ながらそれは無理な注文でし…」

「なんでだよ！？さっきは、わたしが責任をもって送り届けるでし！っとか言ってただろ？」

「なるほど、そういう捉え方もあるでしね。これは一本取られたでし！あははでし」

イースは小首を傾げ、頭を小突いた。可愛い子ぶってるつもりなのか。こちらら話がかみ合わない苛立ちを、作り笑顔で必死に誤魔化しているというのに。

「連れてきたなら、送り返すのだってわけないだろ？なあ頼むよ」

「それは、ちょっと出来ない相談でし…」

「そこをなんとか…」

「それは無理でし…」

「なぜ…？」

「だって、イースにその気がないでしからね、うふっ」

イースは小馬鹿にするように忍び笑いを漏らした。俺の中で何かが割と爽快な音をたてて、切れた。

「人が下手に出てりゃ、愉快なことベラベラと言ってくれるじゃないの…」

俺は両手を前にかざし、怒りで引きつった笑顔のままゆっくりとイースに歩み寄った。

「あ、あわわわ、何をするつもりでしか、ユキトしゃん！」

「イース、お前の人を見下した態度と、俺の下の名前を馴れ馴れしく呼んだこと、辛うじて許そう。しかしな…」

「こ、怖いでしい、逃げるでしい〜！きやあっ！」

イースは慌てて逃げようとして転んだ。俺はイースの両足を掴み、がっしりと両脇に抱えた。

「いきなり空に浮かんできたかと思えば、あろうことか月まで飛ばしてくれやがってこの破天荒娘！さっさと地球に返しやがればカヤロオオオ！！！」

イースの身体がゆっくりと旋回を始め、最初は楕円、ついには綺麗な円を描く。大人気なくとも構わない、本気のジャイアントスイングを食らえ！

「ひぎいい、ごめんなさいでしいい！」

「許さあん！このまま天王星までぶっ飛ばす！」

「うわあああん、助けてくださいでしいいっ！」

さすがに本当に投げ飛ばしはしなかったが、それでもかなりの時間回し続けた。俺自身相当疲労したが、それでイースさんが改心してくれるのなら安いものだ。

俺はまだくるくる回っている頭を抑えながら立ち上がった。

「どうだ、そろそろ俺を地球に帰す気になったか、って、あちゃー…」

俺は思わず手で目を覆った。イースはお尻を突き出してうつ伏せに倒れていたのだが、その姿のけしからんこと。年頃の娘が惜しげもなくお尻を晒しているのである、しかもよく見ると紐パン。さらによく見ると、お尻はぷるぷると震えていた。

「こんな恥辱は初めてでし…。あと、お尻見すぎでいい！ユキトしやんの変態、鬼畜、悪魔！」

「否定はしないけどね」

「きいーっ！開き直るでしか？！少しは否定しろでしっ！」

「では一言だけ言ってやる。あー、ごほんっ」

俺はわざとらしく咳をしたあと、至近距離まで顔を近づけ言った。

「目の前に下着同然のかわいい女の子がいて、月の上に二人きり。もし俺が本当に鬼畜で悪魔なら、お前はとくに慰み者になってるぜえ？」

俺が瞳を逸らさずはつきりと告げると、案の定、イースは顔を赤くして瞳を逸らした。胸に手を当て、ちらちらとこちらを見ながら、それでも反論しようと口を開く。

「うう…、でも太ももすりすりされたでし。変態さんでし」

「あんなのは、地球じゃ挨拶みたいなものなのだ」

「そんなの嘘でしょ、…あっ！わかったでし！ユキトちゃん、不能だったんでしね。ご愁傷様でし」

イースは万事納得とばかりにぽんと手のひらを叩き、人差し指をたてて言った。

「んなわけあるかぁアアア！」

「それじゃ仮性、短小？わたし、かわいいの嫌いじゃないでしょ！だからユキトちゃんも自信を持つてし、イースは応援するでし！」

イースは両腕で小さくガッツポーズを作った。俺を励ましているらしいが、冗談じゃない。

「黙って聞いてりゃ勝手なことぬかしやがって……俺はインポでも仮性でもなあああああいつ！それにお前みたいなチビッコに欲情したりもしないんだよお！」

「こちら現場リポーターのイースでし。早速マイクを向けたと思いますでし。息子さん、実際のところはどうか？……返事がない、ただの屍のようでし」

「妙な一人芝居をするな！」

「いやーん！ドラマティック・バイオレンスでしー！」

「それを言うならドメスティック・バイオレンスだ！しかも意味違うし！」

俺はイースにヘッドロックをかけ、もう思い切り強く締め上げた。この俺がこんな変態コスチューム娘にいいようにからかわれるなんて。く、くやしい…。

「はあ、はあ…。俺をここまで手こずらせるとは大した女だよイス！だがそろそろ観念したらどうなんだ？」

「きゅー…」

俺は肩で息をしながらイスを見下ろした。イスは再びお尻を突き出し地面でのびていたが、やがてゆっくりと立ち上がった。口の端に謎の笑みを浮かべながら。

「うふ、うふふっ」

「なんだよ、何がおかしいんだ」

「甘いでしょユキトちゃん。わたしにはあなたに使命を課すという大事な目的があるのでし。そのためならば、どんな恥辱であろうと、喜んで受けますでしょ！」

「喜んでって…、お前、まさか…？」

俺は無意識のうちにあとずさりしたが、イスがおもむろに抱きつき、それを阻んだ。そして懇願するような上目づかいで言った。

「逃がさないでし。ここでずっと…、いっぱいイスをいじめてくださいでし」

そう言って、イスは甘えるように俺の胸に頬ずりした。

俺は立ちくらみがした。額に嫌な汗が滲む。

悟ってしまった。俺はこの女に勝てない。なぜならこいつは、物理的・精神的ダメージを全て無効化する、最強の性質もとい性癖の

持ち主なのだから。

「う、うわあああつ！」

「ああん、待つでしユキトしゃん！」

俺はイースを振り払い逃げた。敗北を認めた今の俺にはそうすることしかできなかったのだ。

そのとき、空を裂くような奇妙な音が聞こえて、背後を振り返った。イースだった。黒き翼を羽ばたかせ、飛翔しているではないか。

「逃げないでくださいでし。イースはこんなにも、ユキトしゃんを求めているというでしのに」

「くるなああつ！この、変態っ！ドMっ！悪魔あつ！」

「ああんっ、その調子でしい、言葉責めは大好物でしいい」

「うわああああつ！誰か助けてくれえっ！」

誰でもいい！俺を元の世界へ、現実へ、地球へ帰してくれ！

そう心の中で強く願ったそのときだった。逃げる俺の目の前に光が迸ったかと思うと、それは爆風と衝撃音を伴って辺りに飛散した。稲妻が落ちたのかと思ったが違った。目の前に現れた新しいクレーター。その真ん中に、一人の女性が立っていたのだ。

そいつはこちらに気づくと、一枚の羽根のようにふわりと宙を飛んだ。ひとつ飛びで俺の目の前まで現れた。

俺は思わず見惚れてしまった。地球を背景に、神秘的な水色の髪をなびかせ、瞳は海を思わせる深い青。白い衣を纏ったその姿はギリシャ神話に謳われる女神を思わせた。

「…颯行人さん？」

「は、はじめましてっ！颯行人と言います！…ってあれ、なんで知ってるんすか？」

「ええ、それにはいろいろ事情があるのですが、とりあえずはお会いできて一安心です」

一安心とはどういうことなのか。納得のいかない俺に対し、女性は一っこりと優しく微笑んだ。

「とにかく詳しい話はあとで。それよりも今は…」

女性は俺の背後を強く睨みつけた。その視線の先にはイースがいた。

「そこにいるのは、イース。あなたの仕業だったのね」

「お久しぶりでしね、アースちゃん。いったいぜんたい、何の用でかしら？」

「トボケるのはなしよ。こっちは重力システムと輪廻転生システムの全てを調査しても、異常一つ見つからなかったのだから。颯行人誘拐事件の犯人があなたであることは、微塵の疑いもないということ…」

「おい、どういふことだよ！誘拐事件って…お姉さんはいったい何者なんだ？」

一触即発の二人の間に、俺は恐る恐る割って入った。二人とも、まるで毛を逆立てる猫のようにお互い敵意を露わにしている。

「改めてはじめまして、私の可愛いチルドレン」

女性はそれまで静かにイースを睨んでいたが、俺を見るやぱつと顔を明るくした。

「私の名前はアース。未来永劫、あの青く美しい星とともに在り続けるものです」

そう言って、アースは地球を指差した。

俺は女性と地球を見比べた。アース、地球……。どうやら俺の思考は随分と柔軟になってきたらしい。

「もしかして、お姉さんは俺を助けるために地球からやって来てくれたの？」

「そのとおりです。さあ、帰りましょう、私たちの惑星へ」

「ちょっと待つでし！アースちゃん、何勝手なこと言ってるでしか！」

イースは憤慨した様子で駆け寄ると、俺の背中にべったりと抱きついた。

「ユキトちゃんは使命を果たすためにわたしと一緒に来るんでし。ね、ユキトちゃん？」

イースに耳元で囁かれ、俺は不覚にも全身を駆け巡る甘い痺れに

身悶えた。あと、背中の方でなにやら柔らかいものがぽよんぽよん弾んでいる気がするんだが、なんでしょう？

「いいえ、私と一緒に地球へ帰るの。そうですね、行人さん？」

アースは微笑し、そっと俺に手を差し伸べる。不思議な声だった。俺の心から煩惱が消え去っていく。心が澄み渡っていく。

きっと限りなく純粋で無垢なのだ。魅力がないという意味ではない。たとえるなら悠久の大地。あるいは連なる山麓、白銀の霊峰、霞みに浮かぶ湖畔、蒼穹の天空、無限に広がる海岸線。そこには煩惱は存在しない。あるのは非の打ちどころのない美しさ。

俺は知った。彼女は、地球そのものだ。

「俺、帰ります。地球へ、生命の帰るべき場所へ、ぐえ！？」

「だめだめだめだめ、だめでしー！！ゼツタイ帰さないでしよっ！」

イースが俺の首にがっしりしがみ付いた。自然、俺の首は強く強く締めつけられる。

「は、な、せ、イース！俺は地球に帰り、大自然のなかで悟りを開くんだった！」

「ああ、ユキトちゃん、すっかり毒されてるでしょお！ええいつ、こうなったら愛情注入でし！ぺろぺろはむはむ…」

さながら甘える子猫のように、イースは俺の耳に愛情を注入した。地に足がつくような感覚。俺ははっきりと自我を取り戻した。

「はっ！俺はいったい何をやって…？」

「ユキトちゃん、大自然オーラに心を許しちゃだめでしょ！最終的にはシャクテイ・パットで洗脳されて廃人確定なんですから」

「ああ、それ聞いたことあるぜ。たしか、インコ真理教だっけ？
・ちがうな」

「ちょっと！私はインチキ宗教団体の教主などではありませんよっ
！」

アースはさも心外と言わんばかりにぷりぷりと怒ってみせたが、

「いけない、つい取り乱してしまったわ。平常心、平常心」

小さく深呼吸をしてから、アースはきりつと威厳ある表情に戻った。そしてイースをびしっと指差し、威厳たっぷりのポージングで言った。

「私のカリスマを煩惱で中和するとはなかなかやる。でもそんな荒療治がいつまでも上手くいくかしら？」

「そっちこそ、威勢よくいられるのも今のうちでしょ、べろべろばー」

「幼稚な真似を。ガキンちょ…」

大人にふるまいながらも、アースの両手は悔しげに震えていた。イースが満足げにほくそ笑む。

「へーんでし。わたしのユキトちゃんは誰にも渡さないでしょーだっ」

「いいかげんにしろっ！誰がわたしのユキトしゃんだ」

「きゃっ!?!」

俺はイースの腕を振り払い、立ち上がった。反動でイースは尻もちをついたようだ。

「何するんでしか、ユキトしゃん！」

「うるさい、だいたいなんだ？使命だとか勝手なことばかり言って」

「それは、もちろんこれから説明するでし！」

「その必要はない。俺は地球に帰る！」

俺はイースにはっきりと断言すると、今度はアースに向かって言った。

「アース！あんた、本当に俺を地球に帰すことが出来るのか？」

「はい、それはもちろんです！私の力を使えば、すぐにでもっ」

アースは胸に手を当て、にこやかな笑顔で答えた。俺は咄嗟に顔を背けた。

「あの、悪いんだけどさ…」

「はい、どうかなさいました？」

アースが心配そうに俺の顔を覗きこもうとする。俺は身体を逸らしてそれを避けた。

「なるべくこちらを見ないでくれ。あんたの目を見ると、なぜか心の底から出家したくなるんだ」

「そ、そうなんですか!？」

不思議だが、本当だ。

「そうなんだ。あと出来ればもう少し小さな声で頼む。あんたの声にも、俺の人生観を歪ませる力があるらしい」

「わ、わかりました…」

アースは力無くしょんぼりと視線を落とした。申し訳ないとは思うが、出家したくなるのは本当だから仕方がない。円滑に話し合いを進めるためならば、俺は鬼になろう。

「何よりもまず地球に戻ることが先決だ。アース、さっそく始めてくれないか」

「はい…」

アースは斜め右下の何もない空間を凝視しながら呟いた。俺の言ったとおりにしてくれているのだから感謝すべきなのだろうが、なんか怖い。

ふと、がるるるっ、と小さく呻くような声が聞こえた。イース

が威嚇する獣のような目でこちらを見ている。

「ユキトちゃん、本当に地球に帰るつもりなんですか」

「ああ、男に二言はない」

「イースの気持ちを、裏切るんですか!？」

「裏切る？俺が地球に帰ることと、お前の気持ちは関係ないだろ」

「ひ、ひどいでし…。わたし、ユキトちゃんとなら仲良くなれると
思ってたでしのに」

イースは目に涙を浮かべてそう言った。そしてわあわあと泣き出した。

「お、おい、泣くやつがあるか…って、痛っ?!」

「うるさいでし、そんならもう地球でもどこでも勝手に行くがいい
でし〜!」

「やめろ、落ち着…ぐはあっ!」

「あの、お取り込み中のところ申し訳ないのですが…」

「ア、アース、助けて・・・」

「地球に戻る方法について少し御説明させていただきたいのですが
…」

「・・・」

イースはひとしきり俺を殴って少し落ち着いたらしい。俺は全身打撲で地に伏せり、完全に沈黙していた。

「では説明しますね…」

何事もなかったように振る舞うアース。お前、絶対わざとだろ・・・。

「さっさと話してくれ・・・」

「説明なんかさせないでしょ!」

不意をついてイースがアースに飛びかかろうとした。だが、俺は先読みしていた。一瞬でイースの背後に回り込むと、そのまま羽交い絞めにした。

「させるかよイース!」

「わーわーわーっ!・・・もがっ!?!」

大声を出して妨害しようとしたらしいが、手で口をふさげばそれでもできまい。俺が目で合図すると、アースは小さく頷いた。

「それでは説明します。地球までの時空間転移方法ですが、私の力でこの場所に疑似GSシステムを作動させます」

「疑似GSシステム?」

「そうです。疑似G Sシステムの作動に成功すれば月面にライフストリームが形成されます。行人さんの魂は肉体と分離してライフストリームの中に取り込まれ、それを經由して地球の輪廻転生システムのなかに再び組み込まれる、という仕組みなのですが…」

「さっぱりわからないっす」

「ですよ。こればかりは実際にやってみないことには」

「かまわないよ、さっそくやってくれ！」

「わかりました…」

「もがもがっ！ぶはあっ！」

手のひらを振り払われた。暴れるイースを必死の思いで抑えつける。

「離すでし、ユキトちゃん！まだ地べたを舐めたりないんでしか？」

「恐ろしいっ！アース、今のうちに早く！」

「ラジャーです」

アースは瞳を閉じ、両手を広げた。すると、不思議なことに彼女の足元に光の粒が集まり始めた。無数の蛍が飛び交うような、淡い緑色の光が渦を巻いてアースの身体を包む。光はさらなる輝きを放ち、それは天にまで届く巨大な光の柱となった。

俺は我を忘れてこの光に見入っていた。俺はこの光を知っている。神々しくも懐かしい輝き。原初の光。それはおそらくこの世に肉体

をもって生まれる前の記憶。魂だけの存在だった時の記憶。

「いけない！あの光を見ちゃだめでしつ、ユキトちゃん！」

イースはとつさに叫んだが、すでに遅かった。俺の網膜はその光を焼き付け、瞬間、全身を貫くような得体のしれない衝撃が体中を奔った。

「輪廻転生システム起動準備：完了。限定解除まで残り5秒、：2、1、0、成功。時間経過、宇宙座標、誤差レベル計測中：0、00001。疑似GSシステムの亜空間転移が完了しました」

アースは呟き、ライフストリームの中を上昇していく。

何も分からなくなった。何も。ただただ、心が光で満たされていくような感覚だった。意識はぼんやりと霞みがかかり、俺は奇妙な浮遊感に身を任せた。自分が魂だけの存在となり、すでに肉体から離れつつあることなど、知る由もなく。

「目標の肉体からの離脱を確認。フェーズ3に移行します」

「ユキトちゃん！目を覚ますでし、ユキトちゃん！」

「・・・無駄よイース。GSシステムが作動した今、彼の魂はライフストリームへ帰るが定め。残されたそれはただの肉の塊よ。蘇る道理などないわ」

女の声が聞こえた気がした。どこか遠いところから、俺の名前を呼ぶ声が、一度ならず二度も三度も。

うっとうしい、邪魔をするな、俺はライフストリームに帰るのだ。それをなんだ、下の名前で何度も呼んで、馴れ馴れしいヤツめ。

「もうおよしなさい。疑似とはいえ、GSシステムは全知全能を体現したあらゆる魂の集合体、究極の存在なのよ。煩惱なんて俗物で太刀打ちできるはずがないわ」

「そんなこと、ゼツタイないでもん！愛があれば、人は何よりも強くなれるのでし！」

少女の悲痛な叫びが聞こえた。どうしてだろう、こいつの言葉はなぜ、俺の心にこんなにも響く。どうして俺はこいつのことを、心配している。その答えを、俺は知りたい。

霞は払われ、意識がはつきりと元に戻った。俺は後ろを振り返った。そこにはイースと、彼女に抱きかかえられている俺がいた。

「俺が二人いるのかっ!？」

いや待て。まず視点からおかしい。俺は空中に浮かんで自分とイースを見下ろしているのだ。それにまずは俺自身の、この透けた身体はなんだ。

「ユキトちゃん?!あれれ!？」

イースが驚いたように自分の腕の中の俺と、天に浮かぶ俺とを見比べている。

俺は流されるままに上昇し、ライフストリームの渦のなかへ、アースの元へと近付いていく。

「自我を取り戻しましたか・・・、御気分はいかがですか？」

「お前の仕業なんだな。この透けた身体は俺の魂か」

「ご明察です。もちろん地球に戻るためですよ。そのために肉体は必要ない。あなたはここで死ぬのです」

アースは俺の目を見てはつきりとそう告げた。謎の微笑を浮かべ、もう俺から視線を逸らすこともしなかった。俺は肉体のない魂だが、頭に血が昇るのを感じた。

「どういうことだよっ・・・俺が死ぬ！？俺は地球に帰るはずだろ？」

「ええ、ですがそのためにはあなたは自己の肉体を放棄しなければならぬのです。そうすることであなたは魂だけの存在となり、無事地球へと還るでしょう。地球へと還り、魂が輪廻転生を経て再び肉体を手に入れるのは百年のちです」

俺は絶句した。いったい何のために地球に戻るのか。保育園からやり直すためだというなら、悪い冗談だ。

「アース、こんなのはすぐに中止だ！」

「それはできません。あなたを地球に連れ戻すのが私の役目」

「知ったことか、すぐに止めるんだ！」

「百年なんてすぐですよ？お昼寝してるうちに過ぎるのに・・・」

彼女は怯む様子もなく淡々と言葉を繰る。

「それにシステムはすでに第3段階へと移行しています、強制終了すれば魂は永遠に宇宙空間をさまようことになります」

「俺を騙したのか!？」

「たしかに、初めからこうするつもりでした。先ほども述べたようにこれは私の使命だからです。そして私は私の使命を全うします。あなたの意志は、関係ない」

アースははっきりとそう言い切った。その眼には微塵の迷いも、情けもない。出会った頃とは、まるで別人だ。

しかし、こいつにその気がないのなら自力でなんとかしてやる。俺は眼下のイースに叫んだ。

「イース!これが幽体離脱のようなものなら、本体が目覚めれば戻るはずだ。俺を叩き起こすんだ!」

「わかったでし!さあ、起きるでし、愛の鞭でし目覚まし時計でし!」

地面で跳ね返る俺のボディ。それでも俺は目覚めない。

ふと、ある異変に気づいた。本体をイースに殴られるたびに、少しずつだが魂の透明度が強くなっている。

俺はアースを見た。だが彼女の表情からは何も読みとれない。ただ無関心そうにイースを見下している。

「だめだイース!それ以上やると俺が消えてしまう!」

「あわわっ、ご、ごめんなさいでいい」

イースは慌てて殴るのをやめた。だがそれでも、俺の魂の透明化は緩やかに進行する。

「あなたの魂は、風前の灯なのですよ。このままではこの世からあなたという存在そのものが消える。さあ、早くライフストリームに還りなさい」

「騙されちゃだめでしょ！魂が肉体に戻れば、ユキトちゃんは生き返るでし！」

イースは両翼を広げ、天に羽ばたいた。そして両の掌を合わせるように構え、アースと対峙する。

「何のつもりかしら、イース？」

「決まってるでし！あなたを討つ！」

イースの瞳が緋色に輝く。稲妻のような輝きが突き出した両手を走り、赤い閃光がイースの身体を包んだ。

「言ったはずよ、今ここで強制終了すれば魂は永遠に戻らない。あなたに私を撃つことはできない」

「くっ・・・」

イースは戸惑うように顔を曇らせた。赤い光が小さくしぼんでいき、やがて消えた。

すかさず、アースが右掌をイースに向けてかざす。強大なライフストリームの奔流が、アースの右手に急速に収束していく。

「すぐにライフストリームを解いたのは少し考えが足りなかったかしら」

「っ!!」

「イース!」

俺は叫んだが、遅かった。一瞬の出来事だった。けたたましい轟音が鳴り響き、雷光が駆け抜けたかと思うと、イースはすでに地に堕ちていた。

「なんてことを・・・」

「動かないで!」

背後からの怒声に、俺は硬直した。

「今さら何をしようとも無駄です。それに、あなたも同じ目に遭いたくはないでしょう?」

俺は恐怖に震えた。何が起きたのかは分からない。ただ、イースが黒焦げになって死んでしまった。その事実が俺の心を凍えさせた。アースは静かにため息をつく、眼下を見下ろした。

「もともと私たちはある存在によって生み出された、地球を統制・管理するシステムの一部でした。そしてイースはそのシステムから生まれたバグにすぎません」

アースが無表情で冷たく言い放つ。

「あなたを宇宙空間に連れ出して一体何を企んでいたのか。もはや知るすべはありませんが」

無感情で、無関心。皮肉さえ込めない。

「何も殺すことはなかっただろ!？」

「そうですね、殺す必要はなかった。あなたが大人しく私に従ってさえいれば」

俺は震えた。恐怖ではなかった。煮えたぎるような思いに頭がくらくらする。

だがそのとき、アースの表情が陰しくなった。俺を見ていない。地上を睨んでいる。

「勝手に、死なせないでくれでし・・・」

俺は慌てて地上を見た。イースは満身創痍ながらも立ち上がり、こちらを見ているではないか。

ふと、背後に悪寒を感じた。アースが先ほどとは比べものにならないほど巨大な発光球体を形成していたのだ。

「死に損ないがッ!今度こそ、浄化してあげるわッ!」

一片の慈悲なく、強大な殺意が振り落とされた。

だがそれは弾けたかと思うと、一瞬にしてかき消された。そして地上から天に向けて、一筋の赤い雷光が俺とアースの間を奔り抜けた。

あまりにも一瞬の出来事で、何が起きたのかよく分からなかった。ただ、アースの頬の切り傷から血が流れるのを俺は見た。

「次は身体に当てるでしょ」

イースは再び両手を構え、赤い閃光を纏う。アースは怒りに震えていた。

「どうやらまだ分かっていないようね。私を撃てば、行人さんの魂は永遠に……」

「あなただって命はおいしいでしょね、高慢なアースちゃんならなおさら……」

アースが、歪むような笑顔を見せた。両手を掲げ、稲妻が轟く。その全てが彼女の右手へと収束し、嘶くような音を立てる。凶悪な輝きは、眩しさのあまり直視できないほどだ。加えて恐ろしいほどの熱量が辺りを覆う。こんなものまともに食らえば次こそ命はない。

「逃げるんだイース！こいつは本気でお前を殺す気だ！」

イースもただ事でないことを察したようだ。翼を広げ飛び立とうとした。

「誰が、イースを殺すと言いましたか？」

アースはイースを見てはいなかった。彼女が見ていたのは……

「行人さん、あなたをこの世に留める最後の希望、断ち切ってあげます！」

アースの右手が振り下ろされる。地上に横たわった俺の肉体めが

けて。

「やめろおおッ！」

空間を裂くように、アースの右掌から白光の柱が迸った。神々しいまでの一筋の光。太陽のように眩しく恐ろしい熱量が、俺の身体を一瞬で気化させたかに見えた。だが・・・

苦しそうな声が聞こえる。呻くような声。

「ぐううつ・・・」

イースだった。地上で無防備な俺の肉体の前に立ちほだかり、身を呈してアースの放つ白光を遮っている。黒の翼を盾のように広げながら。

「うああっ、ああっ！」

イースが悲鳴をあげた。異臭が鼻をつく。焦げているのだ。翼が焼け落ちていく。

「イース！もういい、もうよすんだ！」

逃げてくれ、イース。こんなの、敵うはずがない。

「行人さん」

突然名前を呼ばれ、俺は心底震えあがった。

「先ほど言いましたよね、殺す必要はない、と」

アースは無表情に、だが迫るような口調だった。

「頼むっ、イースを助けてくれ……。俺はどうなっても構わないから！」

「わかってもらえて嬉しいです」

「ま、待つでし……」

白光は容赦なくイースを襲い続ける。イースは赤のライフストリームでそれを抑えているが、もはや時間の問題だろう。片膝をつき、何度も苦しげな声をあげている。

「もうよせ！俺のためにお前が傷つくことなんてないんだ！……アース、早くその技を止めてくれ……」

「それじゃあだめなんでし！それじゃあ、ユキトしゃんがいなくなるじゃないでしか！」

イースの翼は焼け落ちていく。俺は歯を食いしばり、目を閉じた。

「もうとても立っていられないんだろ、激痛だって感じてるはずなのに。これ以上お前が苦しむところを、見たくないんだよ……」

情けない。悔しい。俺は男なのに。

「泣かないでくださいでし、ユキトしゃん。イースはこんなの屁でもないんでしょ」

イースは笑顔だった。

「翼が焦げようが、皮膚が焼けようが、髪が燃えようが、イースはそんなの全然痛くないんでし。そんなことよりも・・・」

立ち上がった。瞳に秘めた、炎のように強い意志。

「ユキトしゃんに二度と会えなくなるこのほうが、イースは何万倍も痛いんでしっ!!」

赤のライフストリームがまばゆいばかりの輝きを放つ。アースの白光を少しずつ押し返していく。

俺は哑然としていた。こんなときに俺は愛の告白を受けたような気がしたが。もとい絶望的だった状況を覆し始めたイースに俺は驚きを隠せなかった。

「行人」

冷たい声が俺を呼ぶ。身体のコが凍りつくような、声。

「これから全力をもってイースを焼き払います。ただし、あなたが今すぐに地球に還るならその必要はない」

俺は戦慄した。アースはまだ力を余していたのだ。

「ユキトしゃん! 信じてほしいでし。あなたが信じてくれれば、イースはいくらでも強くなれるんでし」

だめだ、イース。やはりアースは本物の化け物・・・。

「さあ決断してください、行人!!」

「わたしを信じて、ユキトちゃん!!」

俺は飛び出してた。ライフストリームの烈風と恐怖心に逆らいながら、ひたすらクロールで空をかいだ。

俺は信じる。イースを、そして俺自身を。

背後で何かが恐ろしいほどの光を放っているが、振り返るな。今は自分の肉体に戻ることだけを考えるんだ。

「ライフストリーム! 灰になれ!」

アースの白光がさらなる輝きを放つ。視界が真っ白になるほどの輝きと熱風がイースを襲う。

「負けないでし。信じてくれる人がいるんでし、愛があるんでしい、うぐう・・・」

俺は心の中で祈った。耐えてくれイース。今度は俺も共に戦うぞ!

アースのライフストリームの力はますます強まり、俺を吸いこもうとする。

もう一息のところで、もう手の届きそうなところまできて、俺の魂は本体から離され始めた。

本当にあと少しなのだ、まさに目と鼻の先。手を伸ばせば届きそうな距離。

だがあと一步が届かない。歯を食いしばって全霊を込めて腕を伸ばすが、それでも足りない。そしてその距離は次第に伸びていく。

俺の魂は再びライフストリームに引き戻され始めたのだ。

「うう、ああああっ!」

イースの苦しそうな悲鳴が聞こえる。

俺は克己した。こんなものそよ風だ。この程度の逆風で折れるわけにはいかない。

全力で空をかく。四肢をばたつかせ、それは犬掻きとさえ呼べない酷いもの。だが、俺はもがくのを止めない。胸のなかに溢れる思いが、俺の魂を少しずつ前へと押し出していく。

烈風吹きすさぶなか、俺は今一度手を伸ばす。イース、俺はお前一人を死なせはしない！

「ユキトちゃん、ありがとうでし」

イースは振り返り、ほほ笑む。礼を言いたいのかっこだ。

「よろこべイース。この俺と一緒に死んでやると言ってるんだからな」

「あははっ、それでこそユキトちゃんでし。でも、何にも心配はいらないでしよ」

「・・・この状況でよくそんなことが言えるな」

状況は以前として変わらない。辺りは白光と熱風で包まれ、まるで太陽のなかにでも放りこまれたかのようだ。

「あれえ、やっぱりユキトちゃんはイースを信じてないんでしかあ・・・」

イースはぷくつと頬を膨らませた。俺は思わず笑ってしまった。

「わかったわかった、信じてやるよ」

「本当でしかあ〜？」

「本当だってば。で、俺は何をすればいい？」

「うーんとでしね、目をつむってほしいでし」

「目を？」

「そうなんでし、・・・今から本気を出すんでしけど、その姿がちよつと・・・」

「ちよつと、何なんだ？」

「えーと、これからの使命に支障をきたすというか、なんというか・・・」

イースはとても言いづらそうに言葉を濁している。

「なんだよ、やけに回りくどいな。怪獣になるわけでもなし・・・」

俺がそう言ったとき、イースの肩がびくつと震えた。まさか、なあ・・・

「いいよ、目を閉じててやるよ。それが今、俺がお前のためにできることなんだろう？」

「はい、しのびねえでし」

「かまわんよ」

俺はゆっくりと目を閉じた。イースの後ろ姿をまぶたに焼き付けて。

「ユキトちゃんには、恐い思いをさせちゃったでし、ごめんね」

「バーカ、そんなんじゃねえよ」

俺が言いたいのは、そんな言葉じゃない。

「ありがとな、イース」

見えはしない。けど、まぶたに浮かぶ。お前はまたいつもの笑顔で……。

その後、まぶたを突き抜けるほどの眩しさで視界が真っ白になったり、怪獣のけたたましい鳴き声が聞こえたりした気がする。だが、目を閉じていつの間にか気を失っていた俺には、それらが遠い夢の中の出来事にしか思えなかった。

朝げの香りに惹かれつつも、俺は再び布団にくるまり身を縮めた。

もう少しだけ見ていたかった。ぼんやりとだけ覚えている夢。もうどんな夢だったかは忘れてしまったが、楽しい夢だった気がする。しかし今日の俺の脳に二度寝は不要らしい。トントン、とまな板と包丁の音が聞こえる。たまには起こされる前に起きるとするか。寝ぼけまなこでベッドから降りたとき、ふと、足の裏に違和感を感じた。裸足から伝わる、ざらざらでとげとげしい不快感。おかしい、俺の部屋の床はスケートが出来くらいツルピカのフローリングのはずなのに、この岩山のように粗い地面はいったいどういうわけか。しかも辺りは平坦な荒れ地にところどころ大きなクレーター。突き抜けるように黒い空は、星々が散らばり瞬いている。さっと血の気が引いていくのを感じた。全て思い出した。

「あ、ユキトちゃん、おはようでし〜」

イースの声が聞こえた。見ると、そこにはぱあっと明るい笑顔があった。

声を発する気力もない。茫然と立ち尽くした。夢から覚めたら、また夢の続き。否、夢ではない。

「朝ご飯できたでしよ♪今並べるから待っててでし〜」

エプロン姿のイースが、台所から茶碗を運んでくる。そしてちゃぶ台の上に並べ始めた。

そう、ちゃぶ台だ。他にベッドがあり、台所がある。

「座って座って。温かいうちに召し上がれ♪」

イースに促されるまま座布団に腰掛けた。温かなご飯、卵焼き、味噌汁の匂い。朝を彩る食卓としては悪くない。

「つて、ちがうだろっ！」

俺はちゃぶ台をバンッと叩いた。お椀が音を立てて揺れる。

「ど、どうしたんでしか…？」

イースが怯えた目で俺を見た。だが俺はそんなの構いやしない。

「こっちが聞きたいわ！なんでご飯なんか作ってる？アースとの戦いはどうなったんだよ」

「ああ、そのことでしたら。アースさんはわたしが倒しましたでし」

「本当か！？」

「はい、本当でしょ」

イースが得意げに言う。

俺は深いため息をついた。それまで張りつめていたものが消え、肩の力が抜けるのを感じた。

「でしからもうユキトさんは地球に帰らなくて済んだんでしょ」

いや、ちょっと待て。イースが無事だったのは素直に嬉しいとは思うが、

「俺はもともと地球に帰りたかったんだよ！」

「へ？そうでしたか？」

「そうだよ、それがなんで月の上でお前とおままごとしてるんだ！？」

「おままごとじゃないでし！立派なおうちでしょ！」

「どこがだよ！屋外どころか、大気圏外じゃねーか！」

「やああん！ほったつねらないでえーっ」

「やかましい、さっさと俺を地球に帰しやがれ！」

俺はイースの頬を縦横無尽にひっぱり回した。柔らかいほったはよく伸びた。イースの目に光の粒がきらりと輝く。

「う、嬉しいでし、これが夫婦の営み・・・」

「き、気持悪っ！」

俺は思わず手を離れた。さぶいぼが立っている。

イースはしばらく悦に浸っていたが、やがてうっとりとした表情で言った。

「ここは月じゃないでしよ。月はもうどこにもないでし」

「・・・なんだって？」

「わたしとアースしゃんの戦いのせいで、あとかたもなく消えてしまいましたでしから」

「んなあほな・・・」

「・・・アースちゃん、無事だといいんですが。何しろ全力を出したのは久しぶりで加減できなくて。たぶん恐竜を滅ぼしたとき以来でしかない？」

イースの言葉はどこまでが真実なのだろうか。だが一方で、俺の直感はいいつの言葉に嘘がないと告げている。俺はあの戦いを直接この眼で見たのだから。

「ちょっとまって。それじゃあ俺達が今いるこの星は、いったいどこなんだ？」

「ここは惑星イース。わたしが管理する新しい惑星でし」

「イース？新しい惑星・・・？」

俺の頭はますます混乱していく。惑星イースとは、俺達が立っているこの月そっくりの星のことなのか？

「ユキトちゃんはこの星に選ばれたんでし。この星の最初の魔王として。そして・・・」

イースはぽつと頬を朱に染めた。

「わたしの旦那様として・・・」

「・・・それが、お前の言っていた俺の使命か」

「地球からここまでは一万年ほど離れているでしから、アースし

「やんがやってくる心配もないでし。もうどうやっても地球には帰れないでしよ、ユキトしゃん」

「

俺は言葉を失った。この花も緑もなく虫一匹住めそうにない殺風景な星で、俺に死ぬまでイースと二人で過ごせと？

いいや、他に選択肢はあるはずだ。考えろ、諦めるな俺・・・

「ユキトしゃんは、イースのこと嫌いなんですか？」

不意に投げかけられた言葉。イースの表情は曇っていた。

「健気な女の子が勇気を振り絞って告白してるというのに、どうしてそんなに上の空なんですか？」

真っ直ぐこちらを見て、問い詰めるように身を寄せてくる。

「健気な？強引な、の間違いだろう」

俺は茶化すように言ったが、イースは取り合わない。俺の次の句を待って黙っている。俺は気まづくなって目を逸らした。

「変わらないよ。俺は地球に帰りたい」

「それがユキトしゃんの答えでしか・・・」

分かりました、そう答えたイースの顔は何故か笑顔だった。

「惑星イースを地球そっくりにすればいいんでしね」

「は？」

「わたし、頑張るでし！ユキトさんの赤ちゃんいっぱい産むでし！」

「はああ?!」

息巻く少女の言葉に、俺は耳を疑った。

「お前、本気で言ってるのか？」

「もちろん、イースはいつだって本気でし」

「俺の子を作ると？」

「は、はい…そんなに聞かないでほしい、でし」

顔を赤らめてイースは俯いた。

俺の顔も同じくらい赤くなっていることだろう。

イースが俺の胸に身を寄せる。伝わる体温。せつなげな鼓動。その体は小さく震えている。

一瞬の逡巡があった。胸を締め付けるような愛しさに、俺は抵抗していた。後悔する、きっと後悔するに違いない。彼女を抱けば、俺はもう地球には帰れない。

だが・・・

面白いやつだ。俺を命がけで助けてくれた。俺のことが好きだと言う。今も俺を信じて待っている。願わくば、お前の小さく震える体を守りたい。俺はもっとイースのことが知りたい。

少女の漏れるような息遣いが、俺の耳に触れた。俺は彼女を強く抱きしめていた。好きだ。その気持ちを伝えるために、強く強く抱きしめた。

後悔なんて、するはずもない。俺は俺自身で決めたのだから。自分の生き方を。

「ユキトちゃん」

「愛してるよ」

そうきつと、愛があれば、大丈夫。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6334i/>

見知らぬ星の魔王様

2011年1月27日14時38分発行